WASON
HQ
1104
J74+

10. Aug.10
1885
no.2

驛遞局認可
明治十八年八月十日發行

女學雜誌

第貳號

東京萬春堂

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

五常の歌 (仁) 越て行く人をば先に立田山わが身ハ露に猶しほるとも

●女學雜誌第貳號目次

宮中御歌會の圖●宮內省女官錄。東京女子師範學校女敎員●婦人の地位●雜報數十件●梅香女史の傳。川島八重子傳●文を書く心得。候べくい。改めねバなるまい乎●椿頰紅と茄子鋳漿。躍の話。歌の話。櫛をかんざしともいひし事。三味線獨稽古●女に五ッ文字。小兒營養上に關する事。飛瓊が義俠の事を記そ。さんごの珠。十八九の乙女竹馬にのりて遊びし古風。夏日皮膚の黒くなるを防ぐ法。食物の腐敗を防ぐ法。食鹽の好惡を見分くる五則●結髪の問外三件●諸報告數件

八月十日

明治十八年間 女學雜誌發兌日表

七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
廿日	十日	十日	十日	十日	十日
	二十五日	二十五日	二十五日	二十五日	二十五日

廣告正價表

一行一回掲出	但廿三字詰	前金五錢
同 三回以上	同	同 一割引
同 六回以上	同	同 二割引

報告

當分毎月二回の發行と定むると雖ども事業の整頓するに隨ひ漸次回數を增加して毎週一回の發行とすべし●本誌は必ず前金を要するを以て御注文の節は代價郵稅共御送付を乞ふ●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但し不得已者に限り郵錢切手一割增にて申受候●爲替は東京芝區新橋郵便局へ向け御振込被下其爲替券を弊堂に御送付可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵稅表

一冊	正價四錢	郵稅一錢	合計 現金五錢
十冊	同卅八錢	同十錢	合計 前金四拾八錢
廿冊	同七拾錢	同廿錢	合計 前金九拾錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計 前金壹圓卅錢

但し毎號十冊以上づゝ取纏めて御購求被下候方へは賣捌所同樣特別割引可仕候

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

宮中御歌會の圖

皇后宮　御諱を美子と申し奉つり御父ハ一條故前左大臣忠香卿にて嘉永三年四月十七日御誕辰なり皇后かしこくも宮中へ織殿を置き自から呉羽綾羽の手振りを遊ばされ或ハ女學校へのぞませられ生徒の勉勵を賞されまた下民救助として御手元金を賜ハるなど實に有難き賢婦人と稱へ申さんもなかなか畏れ多きとなり皇后宣下ハ明治元年戊辰十二月廿八日にて有き深山雪　さらく／＼に知らぬ昔をしの籬雪にかゝげてみくまの丶山

●宮内省女官錄(前号のつゞき)

十七等出仕

東京　桂　加壽　　東京　佐々木佐久
滋賀　矢野　為　　京都　岡本　岸枝
東京　戸田　美嘉　　岐阜　桑原　久米
東京　三宅　八千代

御用掛准奏任

佐賀　年俸千圓　北島　以登
青森　同　山川　操
東京　同　下田　歌子
東京　同准判任　石原　豊

●東京女子師範學校(明治十八年七月十五日調)

助教諭

神奈川　武村　千佐女　　茨城　豊田　芙雄女
東京　上野　銀女　　東京　加藤　錦女
靜岡　丸橋　光女

附屬女兒小學校訓導

福井　杉田　鈴女　　東京　佐方　鎭女
靜岡　合原　琴女　　兵庫　後閑　幾久乃女

御用掛准判任

東京　鳩山　春女　　靜岡　植村　花亭女
東京　福田　米女　　長野　服部　高女
東京　松岡　登波女　　石川　安達　安女
青森　山川　二葉女　　千葉　安香　烈女
佐賀　三守　益女

女學雜誌第貳號　(明治十八年八月十日)

●婦人の地位　(上)

男と女とハ天質同權なるもの乎そもそも男ハ必らず女を憫れむべき乎またハ女ハ到底男に從ふべきもの乎婦人の地位如何に由りて國家文明の度を卜すべしと云へる議論あるが上に今まの如く婦人改良の論ひさかむなるに當りてハ先づ婦人なるものゝ地位ハ到底如何程に在るべきものなるやを定めずバ不可なり之を喩ふるに今ま殆んど倒れんとする家屋を支へて之を適當の住ひ場となさんにハ先づその結構の遂に正當の有樣に立たせ得べきや否やを吟味したる上ならでハ見込もなく左を擧げ右を起さんとするの愚なるが如きならん由て今ま左に愚見を畧述して日本婦人なるものハ必ずや如何の地位にまで至らすべきものなるやを定め以て其の改良策の嚆を示すべし

つらつら古今各國の歷史に由りて人世進步の有樣を擇ぬるに文明開化ハ年々に進み來りて其間に種々の階級を畫したるを見る先づ其の段々を大畧に區別すれバ人世の開化ハ凡そ三段にわかち得べきが如しろ

を何々と云ふ第一を野蠻の時代第二を半開の時代第三を開化の時代とするなり固より各時代の内にも上下の相違ありて其相違の度はたとへバ梯子を登りゆくが如くならんと云へども議論上よりハ先づ右樣に區分するを便宜とすべし而して男と女との交情に關はる有樣の進歩をりかたんにも亦たいろ〳〵の段段ありと知るべし是ハ何々と云ふに亦た均しく三段ありて第一に色の時代第二に癡の時代第三に愛の時代ありとするなり色とハ動物の牝牡が相ひ交接するに似たる如きたゞ肉体上の情慾にして癡とは所云る情より出るもの愛とハ則ち眞正の靈魂より發するものと知るべし斯て此の二種の區別を互ひに相應ぜしめんに色は野蠻の時代に尤も多く行はれ癡ハ半開の時代に甚ぶしく行はれ愛ハ開化の時代に至りて后ち初めて行ハるべく人々の年代に就て云ふときにハ色ハ尤も少年の時に多く癡ハ壯年の時に甚だしく愛ハやゝ年老ひたる后よ至りて初て熟するの有樣ありて而して人物に就て云ふときには三種の交情ハ上中下三種の人々に於て各々尤も多く行ハるゝ所ありと知るべし

斯て第一野蠻の時代に於ける比ほひにハ戰爭止むときなく酋々相伐ち落々相ひ爭ひて強きもの弱きを壓し優勝劣敗の結果尤も明かに見ゆるなるべし而して婦女ハ何の世に於ても必ず子を產むと云ふの性質あるものなれば体力に付きてハ必ず男子に劣る所あり而もこの比ろハたゞ色の行ハるゝ時代なれバ別に男子に愛せらるべき事もなくたゞ其力の弱きが故に非常に男子の壓制をうけ思ふに非常の束縛を蒙りしとなるべしこれと婦人の地位の最下給なる時代とす第二半開の時代にハ癡情の尤も行はれたる比ろなるを以て婦女は其力に於て如何に男子に劣る所ろありとハ云へ男子ハ必ずしも之を非常よ虐待するみとな

く反て或は之を太甚しく優待したる所ありしならん然れバ婦女も之に甘んじて多少其力を伸バし或ハ文學に藝術に其才をこゝろむるを得たる余裕ありしなるべし支那に於てハ唐宋の世西洋に於てハ希臘羅馬の初め我國に於てハ藤原氏の比ろと恰もかゝりし時なりと知るべし當時紫式部、清少納言、伊勢、和泉なんぞれ如き男まさりの優物の現れ出でたるハ固と其故ありしならん然れどこの時代の末の方に及びてハ何の國に於ても必ず封建の世となるべき理由なれバ隨つて子を產まし血統を續ぐの事非常に大切となり婦女ハたゞ之が爲にのミ生存するものとなるべし斯てハ其地位反て劣りかの癡情れみの行はれたる比ほひよりハ男子に優待せらるゝと或ハ薄からん譯あり彼の昔し婦女を敬ひたりと云ふチウトン人の間ぇ於てすら老婦と幼女とを殺すものは罰金二弗にて可なれども產子年代の婦人をころさたらんものハ罰金六弗を要すと云又ハ女に子なきを去れとの金言たり得し如き失敬の行ハれたるハ必ず此の比ほひなりし事と知るべしされを婦人の地位の中等なりし時代とす

○○○○○○○第三開化の時代とハ即ち愛の尤も多く行ハる時代に、して現今の歐米諸國ハ恰もこれに達したる者と云ふべし此に於てか婦人初て男子の輕蔑を免れ亦た男子の壓制を脫し一個の人類たる權力を享けて天賦の品才を充分に發達するを得或ハ官吏となりて國民の委托を盡し或ハ一技を揮ひて文海を動し或ハ藝人となりて巨万の富を収め優温の中ち自から堂々とまてよく男子の社會に拮抗するを得るに至れりこれを婦人の地位の上級に達したる時代とす

顧ミれバ我國現今の文明ハ正に半開の時代を脫してやゝ開化の域に入らんとするの景況ありて男女の交情に就て云ハゞ癡情の時代ᄆ過ぎて或ハ愛の界に進まんとするの時代に在り然らバ是れより日本婦人

を改良するの地位ハ即ち所謂る第三段の上級に移るに在りて其の手本ハ之と歐米諸國の女風に取るべきなるか否や是れ吾人が尤も注意して撿究すべき大切の條件ならんと思ふ試みに下も少か之を論せん

●卒業證書授與式　去る廿九日は東京女子師範學校に於て卒業證書授與式を執行し午前九時來賓及女兒小學校生徒第一式場に列す當日の來賓は小松宮及ひ息所有栖川三品宮の御息所三條太政大臣及夫人令孃大木文部卿鍋島式部職長官及夫人其他文部書記官直轄學校長等なりし夫より右生徒の全科卒業證書及優等生へ賞品を授與し生徒惣代吉村カネ謝辞を演ぶ次に唱歌同十時二十分來賓及本校生徒高等女學生徒孰れも第二式場に列し奏樂唱歌等畢りて校長那珂通世氏は夫々報告をなし次に女子師範學科及高等女學校の卒業證書各級修業證書優等生徒の賞品等を授與し大木文部卿福羽同省御用掛の演説あり次に師範學科卒業生總代脇野ツ井及高等女學校卒業生徒惣代片柳クラ謝辞を演べ式畢りて來賓へは洋食の饗應あり又生徒一同にハ折詰辨當を配りたり當日師範學科卒業生ハ脇野ツ井外十四名高等女學校卒業生も片柳クラ外五名なりし

●義捐金六千圓　今回府下愛宕下なる有志共立東京病院に看護婦教育所を設立するに付き其費用中へ加へんとて伊藤(梅子)井上(武子)川村(春子)松方(政子)大山(捨松)佐々木(貞子)諸參議の夫人が發起して諸方より義捐を募り居たりしが去る廿二日迄集りたる金額も六千圓にて義捐者の人員ハ八百四十五名なりと云へり

●髷の雛形　婦人の髮の事に付此頃ろ東髮會杯云ふ者が起りしが是はまた夫と違へど其筋より小笠原清務氏へ婦人結髮の便利と玄て品格の宜しき者を撰み新古式とも取調べ雛形を調製て差出すべき旨を命せられしとの事なり

●音學卒業生　去月廿日音學取調所にて卒業證書を授與せし幸田ノブ遠山キネ市川ミチの三女ハ同廿八日同所助教員に雇入れとなりたり

●文武百官皆な婦人　瓜哇島中に婦人のみにて政治機關を運轉するの國あり即ちバンダムの王國是れなり此の王國ハパタウ井ア府とサマラング府との間に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

在り貢を和蘭に納るゝと雖ども尚よく獨立國たり國王は鬚眉の男子たりと雖ども文武百官に至ても皆な婦人あり此等の女丈夫ハ男子の風に倣ひて馬に跨り常に槍と銃とを携へ巧みに槍を揮ひ又た疾驅の間に能く銃を發つ彈丸黒子の國と雖ども婦人の權利に至りてハ世界無比と云ふべし首府ハ島中豐饒の地に在り風光絶佳眞に圖畫の如し近傍に二箇の砲臺あり以て首府の防衛に備ふといふ

●文明國の芝居　當今佛國巴里の劇塲ポルト、セントマルチン座に於て興行中なるセヲトラ―と題する狂言の飾付及び衣裳ハ莫大の費用を要するものにて今其の一斑を擧ぐれハ舞臺の飾付のミに八千五百圓の費用を要し名優サラ、ベルナル女が帝王に扮する際着する上衣ハ四千五百個の寶石を以て飾り其價も幾何なるを知らず宮人宮女に扮する者の衣服すら一人に付き六十圓を費す下郎の衣裳も二十五圓を要するといふ文明國の芝居は格別のものなる哉

●織物の起原　其筋に於て調査になりし我邦織物の起原を聞に左の如くなりと

錦　雄畧天皇の御宇七年河内國桃原に始む
綾　神功皇后の御宇五年大和國桑原に始む
紬　創始不詳聖武天皇の御宇世に出づ
金襴　天正年間京都西陣に始む
緞子繻子　前同斷○琥珀天和年間京都に始む
綸子　慶長年間京都に始む○天鵞絨　上に同
精好　創始不詳參考書によれバ延久年間とす
博多　天文年間筑前國博多に始む
縮緬　保元年間既に世に出づ創始詳かならず
木綿　天文年間薩摩國に織出す

●黒人種の女丈夫　頃日印度に於て一婦女の身にして國中の婦人社會を改良するとに力を盡すものあり其の名をパンデタラ、マバイと云ひ當年二十七才なり此の婦人ハ豫てより世人に其の名を知られ其の父も學識あるものなりしが故ありて世塵を避け家族を率て里遠き處に棲ミしが先比死亡せしよりパンデタラ、マバイハ國内を遊歴し遂にカルカツタ府に至り同府大學校内なる拔群の才士を撰みて之と結婚したるが不幸にして其の夫さへ病死せしに其意を決して再び夫を迎へず國内婦人の懦弱にして有爲の者なきを憂ひ專ら婦人改良の目的を抱き各都府を順遊して演説をなし居るよしボンベイよりの通信に見えたりと或る新聞に見ゆ

○梅香女史の傳　　月の舎主人録

第一　蕣花の譚一時ならずして
　　　梅が香千里の外にかをる

武夫の矢竹心は日本の國々おしなべての習なれども別きて偉男子を多く出せしは薩の麑島なり然れば優にやさしかるべき撫子の女まで此處には自づからの威容ありて東國輕薄の風習は耳にきくだも稀なりと今茲に西鄕隆盛の名なき軍を起して恩威に赫やく錦の御旗に抗せしとき弓矢とる武夫は言ふに及ばず夫こふ婦母したる娘まで装かひ〴〵しく出陣したる多かる中にさすがは由緒正しき大家とて名義を守りて情の忍び難きを忍びたる族も亦た少からず其が中に故ありて明らさまには云ひがたき某てふ武士ありけり妻とことさらに心あるものなれど一人の娘を教ゆるにも平常よく其道を得たりければ彼の事起りける日とも〳〵夫を諫めて君多年の交りに耐へずしてよし王師に抗せる隆盛をさし殺し得玉はずとも切めては早く身をくらましてよく賊徒の强迫を免れ玉へとすゝめたれど夫は別に止めがたき心やありけんかの夜密に脱出でゝ隆盛の陣へ會したりとなん當時母と娘との失望いかなりしやらんと思ひやるだも哀れなりき

月見ずも秋は物事の千々に悲しき習ひなるを今夜はあれ新月の后ちやう〳〵二日三日と云へば天の景色自ら黒く月の光しろがねの色まさり雲の足いそぎ行くやうに見えて大空には風あるらんと覺ゆ樹葉すでに半ば落ちて万木骨と露れし草叢おもく露を擔ふて虫は音蟋々たりこゝに星もちそてふ草の屋根と月の光に見せて家内はたゞ何となう物暗く破れたる障子の間より微かに燈火を見する哀れの賤の家あり今まで數度び音さして戸を開き手桶をさげて立出づる乙女を見るに年は二八の上一つ二つと越えたらんや

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

う覺にて二九からぬ容姿あり其れ顏ハ古へに沈魚落厂と云へりしも斯くやと思ハるゝ相貌にて之をたとへて薔薇の咲き初めたるが上に玉なす露の三つ四つ降りかゝりたると云ハずバ牡丹の半バ開きたるご風をいたむ風情ありとしも云ハん優温として鐵をも溶かすべく凛乎として人の侮を防ぐよ足る實に絶世の美人なり今ま何事をか思ふらん心重げにハあれど人ハ如何と水くみの井戸の側に立寄りつ綱釣瓶をやをら下して水くまんとし暫し猶豫ひて獨り語つ樣

朝良に釣瓶とられてもらひ水とハ昔日ハしたなく婢の事なしけん千代の吟あらむに遂にハ加賀に此女ありし后の世までに知られたる名吟者となりたる思へバ父上の存亡計りがたく万に一ツ城山の落城と共に果敢なく爲り玉ハむや之を憂き事として母上の此頃の重病妾一身よ集り來る不幸ハ何して斯く甚しきとハ云へ斯る片田舎にひ住ふをば物足らずとは思ハねど由緒正しき吾名家をのくて朽ち果てさせんハ祖先へ對し不幸の極にや候ハんあはれ今ハ水汲ミ米炊ぐわざのミに日を送らんともやハり他年國家に名を現ハさむてありなんや

と雄々しき言葉ハ生れ出し土地の習とハ云ひもそれ天性活潑の氣象に充ちて丈夫も及バぬ大志ありとハ其の樣体にて察せられぬ其時屋内にしハがれたる咳嗽三つ四つして梅よ梅よと呼ぶ聲きこへぬ

○川島八重子傳　（下）

みのとき八重子ハ進みよりたとひ他家に縁付た姉さんじやとて母さんや妹の難儀と知るならバ何とかれ世話をなさるべし兎も角お尋ね申さんといへば老母ハ頭を振り和女ハ左ふろ想ふべけれど最早や他人の妻なると増してお國ハ和女とちがひ義理人情も辨へぬ心立さへ耳らぬ者又た妾とて今更に如何に難澁すればとて瘦ても武士の妻なりしを町家にかした娘の

處へ無心がましく云入てハ最はづかしき事ならぞや此儀ハとゞまり給ひねと母ハ從ふ氣色の見えねど心細き貯への金も纔かに果敢なき身のうへお八重ハ獨り思案に余り茫然として居たりしも外に工夫のなきものから或る夕暮を僥倖にお八重ハ姉の住家なる芝新錢座にハ住たるが町家でこそあれ質兩替を渡世となせ鎌田屋某が店構へハ又た廣大な家なれバ今さらお八重ハもどかしく我身の姿を見るに付て自ら恥て今となり案内を乞ふも間の惡く往つ戻りつ暫時の間ためらひ居しが氣を勵まし斯てハ果じと勝手より案内を乞へバ取次の下婢ハれ八重の素振をみて不審るから奥へゆき云々なりと告るにぞお國ハ暫時考へ居しが兎もあれ此方へ通せよと申付れバ彼の下婢ハお八重を裏手の庭口よりお國が居間にぞ通したり此ときお八重ハ頭を下げ一別以來の挨拶も濟せし後に小膝を進め聲をひそめて言へるやう今宵妾の伺ひしは

申上るも恥かしけれど去年の春から江戸にても物騒しき折なれバ母さん諸とも上總に往しハ貴姉も豫て御存しある篠尾の叔母御を尋ねしにお死去なすった後にして途方にくれしも村人の厚き情けに思ハ宅も年を累ねて漸々と今度歸つて來たりし故お尋ね申して參りしなり何卒姉上母さんや妹の私しを憫みて十金許り貸てよと差うつむきて述たるをお國は聞よりわざとらひ如何なる用かと思ひの外金を貸せとハ鉄面皮なるほど私しの家にては質兩替の家業をすれバ澤山お金ハ有ものゝさう安々と貸されはせぬ全体お前や母さんもあんまりあはてた事ならぞや江戸に戰爭があつたとて私しら抔ハ逃もせず夫に何ぞや上總まで逃た上句の難澁を擔ぎ込れちや甚だ迷惑殊に私の妹となんぞゝ其樣な身姿で來られてハお前ハ夫で宜からうが斯いふ私が下婢等に對し彼樣な身なりの妹があるかと陰で彼是いはれてハ多くの男女を召使

ふ私の貫目が輕くなる以來ハ足踏せらるゝなど煙管とりわげくゆらせる煙草の煙に輪をかけて飽まで嘲呀面憎さお八重ハ堪へずすんでの事飛掛らんとは思へども玆ぞ堪忍の處ならんと口惜涙を押拭ひ〳〵として歸りしが母ハお八重を側に寄せ和女の他出せられしに必定お國が處とハ我身の考へゐたりしが定めし貸ハいたすまひ此のち如何なる事のありとも姉とハ決して想ひ給ふお妾も娘と想ふまじ只此上も和女と侶俱如何なる裏にも家を借り手内職にも致しなば何如やう暮しも立べしと夫より本所二葉町に借家をなしお八重ハ母を大切に孝道を盡す而已ならず一心不亂に針裁縫を專らとして居たりしが容貌といゝ孝心の深きを感じ或る官吏松澤某が懇望せられお八重を妻に貰ひ受られて目出度婚儀を結びしハ明治六年の夏の事にて夫より母をも引取つて玆に榮花をきハめたり却て說く鎌田屋の妻お國ハ妹お八重が久々にて尋ねて來たるを追返し心地よしげに濟して居しハ言語に絶たる者なりしが實に世の中ハ三日見ぬ櫻ならねど鎌田屋は荒地開墾の事より大金を失ひ家財を賣ても足らざる仕義にて夜逃に及びし事なれバ忽地家は人手に渡りて今はお國もやうやくに身の廻りなる手道具を持し儘にて立退しが奢侈し癖の失ざれば何國に其身を寄せる共長く留り居るとならず末には誰も搆ひ付けねバ其處に此處にと彷徨て僅かに露命をつなぎ居たるが妹お八重が立身せしと聞よりも以前のことは忘れしならねど尋ねてわづかの惠ミを受んと荒布の如き襤褸を纏ひ鉄面皮にも聞つる如く漸く尋ねあてたるものゝ又た廣大な邸宅ゆゑ遉のお國も這入りかね立止まりて居たりし折から抱への腕車に打乗て出行く姿を看るよりもあれこそ妹のお八重かと暫時が間は呆れるばかり去れど出行く後なればお國ハ是非なく立ちもどり又夕ぐれに尋ね行き勝

手口より小腰を屈め何卒當家の御新造樣へ國が尋ねて來りしとお取次をバ願ハしと申入るに心得て下婢ハ奥に入りたる間もなく又た出來りてお國をバ一室離れし小座しきへ通し茶菓子を出して厚くもてなし頓てのことにお八重ハ立出で最と丁寧に挨拶を濟せし後ちれ國ハ咄しを聞よりも鎌田屋の破產を大に歎き定めし御不自由あそバすならん些少ながらも妾の寸志御受納あれと十圓の楮幣をバ紙に包みしまゞ差出されて今さらにお國ハ穴にも入り度思ひ邪見の角も茲に折れしやれ八重の前に面目なく嬉し涙と倶にお國ハ其場に平伏て暫時は顏も上げ得ざる其体を見てれ八重は慰めかならずお案じ成さるまじ實に人間の一生は諺ざにさへ七轉び八起と申せバ又宜きとの在すべくまづ夫迄ハ如何にもして須臾お忍びなさるべし歎しのとも此後もお困りなさらバ御遠慮なくれ出あれよと殘る方なき詞を聞きお國はいよ〳〵其仁心の深きに感じ早や此上ハ妹の爲なら我一命も惜まじと茲に善心に立歸りぬ　（了）

○文を書く心得

およそ文通ハ男女に限らず今日使用の爲めなれバ了解のよきを肝要とす肝腎の用事は少しバかりなるを長々と綴りて冗言の多きなどハ讀了るも暇費しなればバ成べきだけ冗言を除去きて簡單なるを開化の文とも謂ふべし（月花等の雅事に用ゐるは格別なり）殊に年始の文の類の如きは禮式ひと通りの物なれバ餘事と多く書交へぬがよし別に用事ある時は返そ書にすべし強てくだ〳〵しき文言を書まじへたるハうるさし又た常の文にハ俗語を嫌ハずなまなかに雅文めうしく書んとてあるまじき詞の用ゐざまなどあるハ却て見苦し唯わろき慣れしを知りて改むべきなり然し近比ろ聞慣れたる漢語ハ取用ゐるも簡便にて可るべしされど女の文にハ假字を交ふるが通用よしとすれ

バなるだけ見苦しき假名遣ひのなからんやうに心がくべきとなり

○蟬を聞きて感ず　　鈴木玉椁

龜山殿七百首に有光の朝臣は「夏ふかく茂る木陰に啼く蟬の聲も涼しき庭の夕風」と詠ぜられしが我淺茅の借舍の如きは庭と稱すべき餘地も無く打水なすべき石とてなければ日影を除けて新堀の川の端にてくつろぎつゝ小鮒釣る兒童を友がきにして柳がかげに暑さを拂ふ折から高き小枝に聲いと涼しく啼つる蟬の暮しう唐土人は齊王の后の君と稱せしも宜なるべしと思ふなり抑々蟬には五德を備へて頭に緌を現はせしは之を稱して文といひ心の淸きも吸ふ露に濁のなきにて知られたり時節を聊か違へずして聲を發そは實に信なり黍稷を受ぬは廉にして又よく儉を守るとは其巣穴に住まぬを見ても古人の稱せしは其金言の過るにあらず蛁蟟つくづくと思へば婦女子も此五德を蛻脫の殼の夫ならで身をば放さず寸時も忘れず文淸信廉儉といふ五ツを守りて怠りなくば其や蟬袋の窮屈なりとも身は茅蜩の小作りも其芳名は秋蟬の鳴音と響き世の中の龜鑑にならせ給へかし故人紹巴翁の句に曰

空せみの世をおどろかす鳴音かな

○候べく候

昔は行なり次第にしておけといふ事を候べく候にやつておけといふ者多かりしが近年は稀になり適々いふ者も其緣故は知らざるもあるめり是は昔の女の文にも候べく候といふ事多くありてゆきあり次第に書ても讀し故これを書やうにしておけといふ意なり實歷頃の輕口話に候べく候と人にすぐれて多く書く女ありしがあまりに筆まかせに書たる候べく候の讀まずと思ひ其側に候べく候を又書て再度思ふは二ツ書しを若やしむ事もやと又傍らに此候べく候は書損

なひのいべくいにて冷座いべくい脇のいべくいの本のいべくいに冷座いべくいと書たりとぞ此話をもて昔はいべくいを多く書たると思ふべし今も童の手習ふ昔ぶりの文にはあれども通用の文には稀なり諺もやう〳〵絶るなるべし

○改めねばなるまい乎　東京　根岸の隠居

綿入を布子といふは昔し綿や絹のなきとき布に蒲の穂を入れて衣たるゆゑ布子といふ今日の綿入れは綿や絹なれば綿子絹子と改めねばなるまい○書院といふは昔し寺院にて書を讀む學問所の名なり然るに酒宴の席を書院といふも改めねばなるまい○書物を一巻二巻といふは昔し紙のなきとき割竹を編み合せてぐる〳〵巻たるゆゑいふなり今日は巻かせして綴るゆゑ一綴二綴と改めねばなるまい○昔し紙のなきときは絹に畫や書をかけりそこで紙といふ字を糸偏に造つた今ま日本紙は楮の木の皮にて造れば紙の字を木偏に改めねばなるまい○昔し綿のなきとき蒲の穂を入れて寢衣物としたるゆゑ蒲團といへり今では綿で造るゆゑ綿團と改めねばなるまい○其外鍛冶を字の如く讀まば鍛治と改むべし○藥鑵は藥鍋のことなり今は湯わかしを藥鑵といふ○印籠は元と印を入れたれども今は藥を入るゝを印籠といふ○菓子の菓は草の實のことなれば米や麥でこしらへるものは米子麥子と改めねばなるまい○昔しは舞臺のなきとき芝と折敷て踊りを見たるゆゑ芝居といふ今日は舞臺にて踊り桟敷にて見るゆゑ芝居の名も改めねばなるまい○神前に手を拍を拍手といふ然るに拍の字を柏の字と取違へ手を拍つを柏手といふの類ひ數知れずあり右様のことゝ誤りとして新たに改むるときは日本の語を丸で造りかへねばならぬそれでは矢張り改めぬがよろしきか諸君如何

○椿類紅と茄子鐵漿

今の少女何にもあれ花のちりたるを取て頬あるひは額へ唾にて押戯れをそる事あり是は頬紅をつけし頃ろのまなびをなしたるか頬紅廢れて後も童あそびに殘りしにて茄子の皮を口に含て鐵漿をつけたるまなびとそる類なり椿の葩頬紅に似たる故此戯れこの花に起りしなるべし椿頬紅茄子鐵漿とかしき對なり享保の頃まではハ婦人の顔を粧ふに頬紅といひて白粉をぬりて後紅と白粉を交て薄紅色にしてこれを頬よつけて端を散したり如此それバ顔色麗ハしく見ゆ元文の初の頃より貴賤共に頬紅を止て白粉バかりを薄くぬり或ハ白粉をぬらぬもあり何故如此するぞと人に問たれバ遊女の粧ひに似するなりといふとあれバ當時の遊女の素顔をだてとしたるより此事の絶たるなるべし今乙御前といふものを畫きても假面につくりても頬と赤く隈どるハ此余風なり

○躍の話　（前号につゞく）

素人ハ大抵頭や手の上の方計り見て餘り下の方は見ぬものなれど少しく躍を知るものは頭や手の方よりハ寧ろ足の遣ひ方をよく見るなり是れ何に由て然るあ躍は其の上手と下手とは頭部にあらざ否あ其の頭部にもあらんと雖ども其頭部にあらんよりは寧ろ足部にあるものなるに依れり故に踊を學ばんものハ最も足の方に注意して足ハ成るべく輕く遣ひ音のせぬ樣にそろ〳〵と躍るべし而して其の板を踏むべき所に至らバ充分に之を踏んで音をさせるなり

○歌の話

歌に二ッの別あり何ぞや三味線に對して歌といふときハ即ち口舌にて唄ふものを指すなり去れど遊藝の種類流派に就て歌といふときハ即ち長唄と目するなり決して混すべからず遊藝の種類に色々あり曰く義太夫曰く常磐津曰く岸澤曰く清元曰く富本曰く長唄曰く越中節曰く加藤節

曰く新内曰くセツキヤウの十一派なり去れど今日に至ても富本越中節加藤節セツキヤウの四派は廢れて其の流行せるもの餘の七派なり而して岸澤も固と常盤津の三味線ありしが仲間もめ出來て終に分派し其の三味線引きの方にて一派を新設して之を名づけて岸澤とはいへり其の事最も近くして二三十年の前へにあり

（跡は次号）

○櫛とかんざしともいひし事

源氏繪合の卷に「朱雀院より梅壺へ御繪奉らせ玉ふ御返事に昔しの御かんざしはしをいさゝかをりて」とあり是はむかし梅壺齋宮にて（俗にいふおものいみ）伊勢へ下り賜ひし時別れ櫛とて帝御てづから齋宮の御頭へさし玉ひしむかしの櫛のはしを（木櫛と定式とぞ）かきとりて哥にそへ玉ひたる也又た同書若菜の卷上女三の宮御裳着に中宮より櫛の箱奉らせ玉ふ所の秋好の哥に「さしながらむかしを今につたふれば玉の小櫛も神さびにけり朱雀院御らんじつけてげにおもたゞしきかんざしなれば御かへしも昔のあはれをさしおきて」右いづれも櫛をかんざしとしもいへり是は髮に刺物なるから髮刺をかんざしといふは音便なり紫式部が比及には女のさそ簪といふ物さらになき故かんざしの名目まがふ事なし

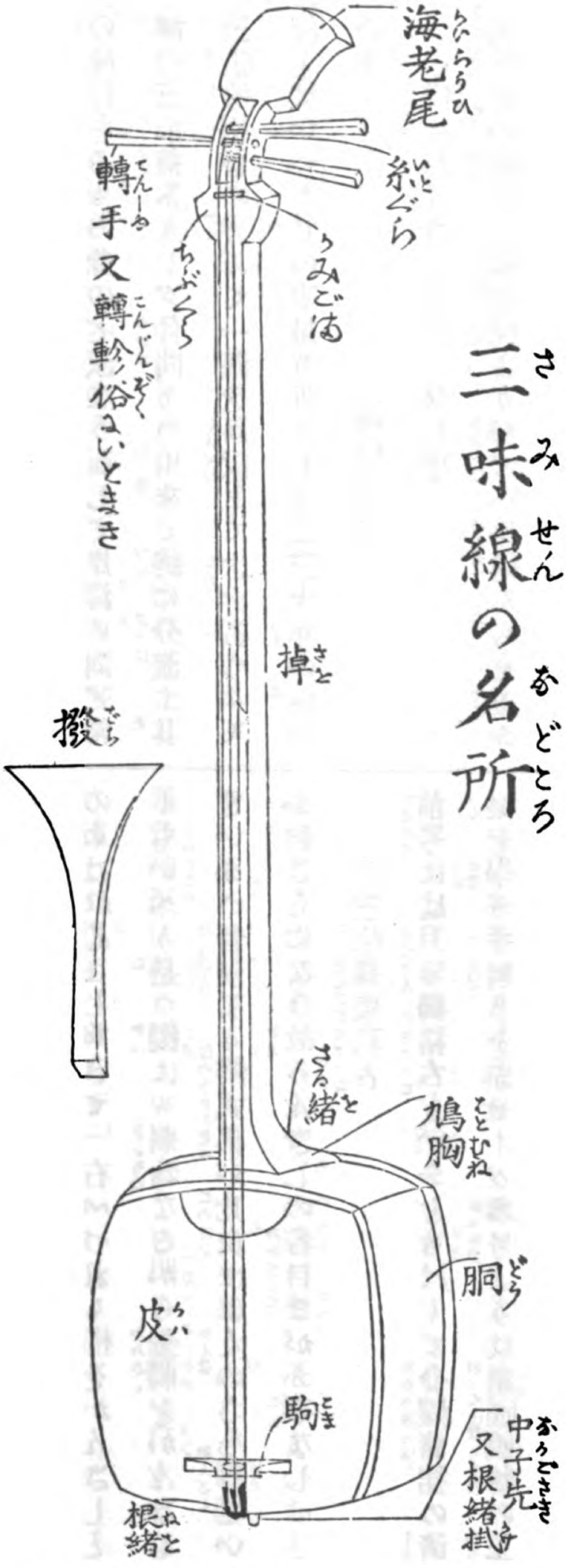
○三味線獨稽古

前号には月琴獨稽古といふをもれして令孃諸君の清樂を學ぶ手解きをなせしが本号よりは皇國鳴物の王とも申すべき三味線は引き方を指南すべし抑〻三味線も或は三線とも云ひ又た三尾線、三絃とも書して遠くその起原より詳説するときは數册は紙上を埋めざるを得ざるが故に此等は由緣は異日に延し玆には直に其の引方を解出すべし

三味線に太竿、細竿の別あり太竿とは即ち義太夫の三味線にして細竿とは其他の歌に用ゆる三味線なり

而して長唄は三味線の竿最も細し去れど當時は稍や太き竿流行するに至れり何れも三味線の構ひ方は稍や膝の前の方に置くべし是れ己れの體と三味線の裏皮の間を廣くし以て音の響うんが爲めなり然るに初學の輩らは兎角三味線の裏皮を己れの體の方に引き寄せたがるものなり故に三味線の裏皮は己れの體にぺつたりと附くを以て三味線の響きは己れの體にて止め遠方に聞へざるべし又た近邊にても其の音清からず人の耳に適はざるべし是の故に三味線の裏皮は成るべくたけ膝の前の方に出して引くべし尤も始めの程は引き惡くゝして自ら己れの體の方に引き寄せ何時しか三味線の裏皮

三味線の名所



れ己れの體に付くものなれど氣の付きたる毎に前の方に出して引くうちには遂に膝の前の方に置て引くことを得るに至るべし而して三味線の表皮は少しく斜に向の方に對せしむべくして其の天向にならぬやう注意べし

（以下嗣出）

○女に五ッ文字　（前号につゞく）

○美　美とは姿形のうつくしきのみならず心をみがきてけがさず正しきをいふ昔しいづみ式部夫保昌と中へだゝりて貴船に祈りけるに禰宜申けるは敬愛のまつりにはのぐら終りて後赤き幣を持着物の前をたゝくかゝげ三べんめぐり賜へとをしへければ式部物をもいはず顔あかめうつぶきければ禰宜ども申すは是程の願におせにかくはせさせ賜はぬとせむれば式部

ちはやふる神のみるめもはづかしや身を思ふとて身をやそつべき　かくよみて心ゆうに見えけるに木陰より保昌出て連かへりふたゝびいもせのかたらひとなしにける是格を捨てかくを求むると身をつゝしみ神慮に叶ふになんされば至善の歌に　よしとみるそのひとふしをなにはえのあしゝるかたにうつさせもがな

○閑　閑とは物しづかにして怒りはら立ことなく妬みうらむ心なくもの事おちつきたるをいふ昔しさる御殿に勤め居たる奥女中の夜ふけてへやにふしてありたるにふしぎに行燈を天井まで引上たり女中思ふにはわれ逆上して此如く見ゆるにやと心をしづめ居るに行燈ます〳〵中をとぶこと早しこれ狐のわざなるべし憎くきことなりとて硯を引よせ紙に狐といふ字をかき灸をあまたすゑけるにやねにギヤッと一ト聲聞へてその後ち行燈も下におりてべつでうなし明る日へやのやねに狐の死がいあると見つけおろすに四ツの足燒れて死したり此ことつかへし君にきこへければ褒美を賜ひしとなん歌に　あさゆふにたもつ

わが身ハから衣たちゐにうつせ道のすがたと(未了)

○小兒營養上に關する事　澤華雲　述

小兒の營養上に最も必要なるは大氣、日光、母乳、乳母、人工育兒法及び食物等なり故に此の諸の事項をして完たからしめざれバ小兒の身体をして善き發育と良き成長とを遂げしむると能ハざるなり而して其の養育上最も貴重すべきは何ぞや曰く初生兒の第一年間に於ける榮養の多寡及び物品の性質等天然の發育に適せしむるに當を得たるものにあるなり故に若し一方或ハ他方に於て其の妨ある時ハ則ち不幸の災害を來たすものにして宜しく注意すべきとなり從來の經驗に據りて見れバ小兒の死亡最も夥多なるは初生の第一年間にあるなり是れ職として此の道を誤るに因るなるべし好しや設令ひ幸ひにして死を致さゞるにもせよ小兒の時の養育上に欠典ある時ハ終に身体虚弱となり後年に至りて如何に善良なる攝生法を勉むれバとて健全活潑なる体質となると難かるべし即ち身体虚弱となれバ其の精神も亦た從つて非薄となるの慮りあり豈に世の父母たるもの其れ之を忽諸に付して可ならんや

(あとはつぎ)

○飛瓊が義俠の事を記す

飛瓊ハ廣陵と云ふ處の何氏の女なり母に隨ひて蜀國の中に成長し蜀王の府に入て事へける梨園と習ひ顔色人に絶れ音聲も又衆を出けれバ蜀王甚だ寵愛して晝夜側らを離たざりき明朝亡びて淸朝となるの初め大帥に得られ仍ほ樂籍につき居たりけるを一都閫なる人適と相狎て千金を以て飛瓊を買去けるを大帥惡く思ひて其短を持て復た千金を索む諸當事も又た責求けれバ更に大金を費せしを以て都閫遂に上より御預りの庫の帑を缺ける其罪を以て獄に下りけれども償ふ籌も無りけれバ飛瓊都閫に向て曰く君妾が故と以て此難に至り玉へり今若小節を惜みて此を守り

居らバ終に主を獄底に陥んとて遂に辭し去て又た漢口と云ふ所に至りて密に一室を求めて處みけるが中秋月朗にして遊人雜沓せる時に至りて飛瓊粉ひて欄干に凭て月に向ひて一聲喉喇けれバ其聲九陌に響傳り觀者雲の如く稱擧せざる者なし明晨より巨商人貴客甍々く至りて車馬門に闐けれバ俄に聲價太いに高くなりて僅に二三月の間に得る所の纏頭を以て都閫の缺額を清しけれバ都閫免されて獄を出ける都閫大いに喜びて速ゝに人を遣て飛瓊を迎へければ飛瓊乃ち至りて都閫に向ひて云けるハ妾は本と烟花の賤質なるを主私昵に溺れて動もすれバ國の課を廃て縲絏に陥ると致し玉ふ故に垢を蒙り恥を忍び復び聲と色とを以て人に媚事へ其纏頭を以て主の幽繫を免かれしめ奉つれりといへども既に一たび潔よくしたる身復び穢濁に陥りぬ倘何の面目ありて偷生て主君れ辱を重ねんやと遂に自經して死にけりとぞ嗟呼其の義俠心の感ずべき堂々たる丈夫と雖ども一歩を譲らざるを得ざる者あり

○さんごの珠

女ハ容よりも心の勝れたるを善とすべし心バへよくなき女ハ心騒がしく眼恐ろしく見出して人を怒り言辭あらゝかに物言さかなく口きゝて人に先ち人を恨み嫉み我か身に誇り人を謗り笑ひわれ人に勝り良なるハみな女の道に違へるなり女ハたゞ和らぎ順ひて貞心に情け深く靜かなるを良しとぞ(女大學)

家に在てハ女となり嫁ぎては婦となり子を生みては母となり賢女ありて後に賢婦あり賢婦ありて后に賢母ありて賢母ありて后よ賢子孫あり王化閨門よ始り家人女の貞に利あるが如き女教の繫る所ろ重し

女ハ顔色の美なるを尊しとせず其の行ひ正しくして德の勝れたるを淑とす(内訓)

婦人ハ中饋を諳ぜざ厨堂に入らざれバ家を治む可ら

ぞ（温氏母訓）

○十八九の乙女竹馬にのりて遊びし古風

近年物の流行の變遷するは世人の知達になりしゆゑかむかしは女兒の知惠づくもいとおろかりけん○一代女に「此四十年跡までは女の子十八九までも竹馬にのり門に遊び男子も定つて廿五にて元服せしにかくもせはしくかはる世や」とあり按に此四十年跡までと貞享三年にいひしは正保の間をさして云つるならん是より今二百年前の女の兒は十八九にて竹馬の遊びとなしたる事は愚げなり今の女兒は七ツ八ツにてもさる遊びはしらざるが如し又廿五を男の元服の定式とせしは市風なるべけれど今にくらぶれば十年遲し以て二百年前の國躰としるべし又一證あり伊呂芝居卷二盆踊の女兒のさまをいふ所に「昔は人の心もとうたうたて娘の子十八九にてまへうしろ見る事もなく男のはてのやふに育つ」正德に昔といひしも六十年前の正保の間なるべければいよ〳〵竹馬を實とすべし（女裝考）

○夏日皮膚の黒くなるを防ぐ法

人身の汗は素と排氣を含むものにして皮膚之が爲よ黒くなるの恐れあり試みに看よ顏色の黒き人は必らず汗を發すると多きを故に夏日の如く天候熱くして汗を發すると甚だ大なるの時に方り皮膚の黒くなるを防がんと欲れば汗の發する每に冷水を以て皮膚を洗ひ或は手拭を微温湯に濡して之を拭ひ去るべし如斯にそるときは特に皮膚の黒くなるを防ぐのみならず又是れ攝生の一端にして中暑の憂ひを兇るゝに足るものあらんとす

○食物の腐敗を防ぐ法　西京　木寺香女史

水飴目方三十匁を醬油一升の中へ入れて能く煮て飴の十分溶解たる時冷して貯へ置けば永く腐敗る事なし又この醬油にて何品なりとも煮るときは常に二三

日間保つものなれバ少くも七八日間ハ味の變るとなし

○食鹽の好惡を見分くる五則

一　少許りにても臭氣のあるものハよろしからず

二　結晶まろくして且り透明るものハよろしとす

三　熾炭れ中に投れて烈しく爆發る者を宜しとす

四　外氣に觸れても濕らざるものをよろしとす

五　清水にて溶解すに底に沈む者あるハ宜からず

●結髮の問（四）我國にて女の髮をゆふ始めは何れの時代なる乎（東京、水原久子）

●いろねの問（五）長歌等に家弟をいろねと云ふ出所字義を問ふ（岩代、伊藤くに）

●白無垢の問（六）嫁入のとき白無垢を著るハ何故なるの教示あれ（信陽、富田松女）

●子字の問（七）婦人の名に何々子と稱ふる子の字ハ如何なる義理あるか（靜岡、近藤しげ）

報告

一編輯上の事務未だ整頓せざるに依り編次の体裁を失する所あり第三號以下逐次に改良を加ふべし

一四方の閨秀より投寄の詩文歌句等數多あり是亦た編輯の都合により第三號以下に續載すべし

一前金落手の上ならでハ雜誌を發送せざる規則なれど併遠の看客ハ送金の御都合も可有之と存じ第貳號ハ（御送金無き分共）一般に送付仕候

一第三號發行迄に多少御入金なき向は御望み無之者と見做し發送相止め申候但し既送の雜誌代價ハ至急に御廻金可被下候

一雜誌發行以來非常に諸君の御贊成を蒙り既に再版迄仕候處此分も追々品少なに相成候間第壹號より御取揃への向ハ至急に御申込可被下候

右之通

女學雜誌本局

萬春堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

○竹取物語俚言解　大本全二冊正價郵税共金五拾錢

○土佐日記俚言解　全二冊正價郵税共金五拾錢

○源氏物語講義　一冊正價郵税共金拾四錢

○明治現存三十六歌撰　全一冊正價郵税共金二拾錢

○明治現存續三十六歌撰　全一冊正價郵税共金二拾錢

○文園自耕　全二冊正價郵税共金三拾錢

○傍訓四書　洋本全一冊正價郵税共金四拾錢

○學校通論　洋本全一冊正價郵税共金六拾錢

○數學軌範　全二冊正價郵税共金六拾錢

○開化日用文　全一冊正價郵税共金二拾錢

○壚原多助一代記　一冊正價郵税共金拾錢

○當世書生氣質　一冊正價郵税共金九錢

○羅馬字雑誌　一冊正價郵税共金七錢

○羅馬字早學び　全一冊正價郵税共金拾四錢

右前金ニテ御注文可被下候

東京芝區櫻川町八番地
大賣捌　萬春堂書房

○貴婦人女學生ニ告

米國筆記學校長ポアン女史曰ク筆記學ハ沈着緜密ヲ貴ブ者ニシテ女子ニ尤モ適切ノ學術ナリト又曾テ時事新報社説ニモ今ヤ泰西諸國女子ノ斯學ニ就ク者日一日ヨリ多シト實ニ盛ナリト謂フ可シ我國斯學ヲ修ムル者已ニ多シト雖ドモ未ダ曾テ女子ノ斯學ニ入ル者ナシ本會大ニ茲ニ感アリ婦女子ノ爲ニ特ニ敎場ヲ設ケ懇切ニ授業セント欲ス有志ノ父兄ハ速ニ申込アレ

神田今川小路壹丁目　玉川堂　日本傍聽筆記學會

東京芝區西ノ久保櫻川町八番地
發行所　萬春堂

持主兼印刷人　大庭宗吉
編輯人　近藤賢三

女學雑誌賣捌所

東京神田區淡路町　巖々堂
同　神田區雉子町　團々社
同　日本橋區新葭町　良明堂
同　日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
同　京橋區木挽町一丁目　萬字堂
愛知縣名古屋本町二丁目　石版社